

地域農業の魅力発見！ 連携・協働の交流まちづくり



札幌市中心部から国道230号を定山溪方面へ車で40分ほどのところにある八剣山周辺の南区砥山・小金湯・豊滝地区は、果樹を主体とした農村地域で、自然の豊かな地区である。ここに親睦と協働を基調に、八剣山周辺地区のまちづくり支援のため、自然環境の魅力の掘り起こしと環境保全、地域の活性化に取り組む「八剣山発見隊」が活動している。発見隊では、平成20年には中国・韓国の留学生や一般市民に参加を呼びかけ、地域住民との交流を図りながら、まちおこしへつなげる国際交流事業として「八剣山国際交流の集い」を実施するなど、地域の活性化に努力している。また、発見隊と密接に協働する砥山農業クラブの活動は、平成18年度の「わが村は美しくー北海道」運動第3回コンクール・人の交流部門で銅賞を受賞、同20年には政府の「立ち上がる農山漁村^{※1}」に選定されている。

砥山農業クラブ代表で、「八剣山発見隊」事務局長の瀬戸修一さんに活動の経緯や今後の抱負などをうかがいました。

消費者へのアプローチを求めて

瀬戸さんは平成10年5月にUターンで東京から戻ってきましたが、小規模農家の経営は思ったより大変でした。共同出荷や大量出荷ができないので卸売市場では小売価格の1、2割といった値段しか付かず、売り上げから経費をとったら所得はあるのか、といった経営状態だったといいます。それで、消費者に直接販売して農家所得を確保する取り組みを進めなければという思いにかられました。しかしそうした取り組みが地域には、ほとんどありませんでした。学校給食に地元で取れた食材を使う“さっぽろとれたてっこ事業^{※2}”への参加を農協が取り次ぐといった、幾つかの新しい取り組みはありましたが、多くの農家が恩恵を受ける格好にはなっていないと感じたといいます。

いろいろな取り組みをしてみたいと思っても、地元では「宣伝やイベントなど消費者との交流や情報発信は農協や行政がやればいいことで、農家はいいものを

八剣山発見隊



瀬戸修一
八剣山発見隊事務局長

※1 立ち上がる農山漁村

農林水産業を核とした自律的で経営感覚豊かな取り組みで地域の活性化に寄与している先駆的事例を選定、全国発信することにより、全国の農山漁村に「地域自ら考え行動する」意欲あふれた活動を広め、推進するもの。平成16年の食料・農業・農村政策推進本部長（内閣総理大臣）決定により設置された「立ち上がる農山漁村」有識者会議が毎年度選定。

※2 さっぽろとれたてっこ事業

地産地消を推進する取り組みとして、札幌独自の基準で、札幌で生産された新鮮・安心・良質な農畜産物とその加工品を「さっぽろとれたてっこ」として認証する事業。札幌市は平成8年から表示制度をスタートさせ、19年度には札幌市農業振興協議会による認証制度を発足させている。

作ってあればいい」という雰囲気だったそうです。

「そこで、札幌に戻って2年目の平成12年、北海道中小企業家同友会の札幌支部に入会しました。同友会では農業生産者と中小企業者が一緒に農業と農業経営を考える“農業経営部会”が発足したばかりでした。地域の人や異業種の人たちと“同友会の収穫祭”というイベントに取り組む姿を見て、非常に意欲的で行動力もある団体だなと思いました。さらに多様な業界の人たちとコンタクトがとれるところがよいと思い、入会しました」

砥山農業クラブが最初のスタート

同友会の人たちが協力してくれることになりましたので、地域の農業生産者が集まり、情報交換する場をつくりたいと、砥山地区の専業農家の人たちに呼びかけ、平成12年4月に砥山地区の8戸の果樹農家で“砥山農業クラブ”という任意団体を立ち上げました。

クラブでは、まず地域広報のポスターや個別農家の看板を作り、地場農産物の試食会をしたり、特産農作物を作ろうと加工用トマトを作ったりしました。当時は“はね品（出荷規格に合わないもの）”リンゴがたくさん出て動物園のエサに出すという状況のときでしたが、同友会の方からの提案で、ワインメーカーに持ち込み、リンゴワインにして売られるようになりました。また、市内のお菓子屋さんと提携して、地域の果物を使ってお菓子を作ってもらう「いちごクラスター」の取り組みは今でも続いています。平成17年から札幌市では「スイーツ王国札幌」という取り組みが始まっていますが、その先駆けとなったのです。

異業種交流会から生まれた八剣山発見隊

砥山農業クラブがきっかけで、同友会メンバーが中心になって、もう少し地域から情報発信しようということになりました。近くに農家があっても、交流の場がなければ消費者も関心を示しません。ですから、サクランボ等の果樹を作っている農家がたくさんあると

いうことを知ってもらうために（農業クラブメンバー全戸でサクランボを作っている）、観光客を農園に入れ、楽しく遊びながらサクランボ狩りをしてもらおうということで、マップ作りや“さくらんぼ祭り”を企画しました。しかし、イベント活動にお金や労力をかけても一過性のもので、その後の効果に期待できないのではないかとそれらの企画に反対する人もいました。異業種の人たちから「まちづくりでは反対意見が出るのは当たり前で、スタートからみんなが一緒になるなんていうことはあり得ないよ」と背中を押され、なんとか祭りをスタートさせることができました。平成14年7月に農業クラブの主催で“第1回さくらんぼ祭り”を開催（第3回からは後述する八剣山発見隊、地元町内会、農業クラブの実行委員会方式で開催）しました。

一方、平成14年1月、砥山農業クラブ主催でいちごクラスターの菓子屋や個人事業主、市立高専、農業クラブ員などによる異業種交流会が開かれ、活動報告と地域づくりの意見交換がなされました。

この交流会の中の有志が集まって、同年3月に地域農業を支援するボランティアグループ「八剣山発見隊」が生まれました。そして、八剣山発見隊が提唱して始まったのが、地域住民を巻き込んだ「八剣山・小湯湯周辺地区まちづくり意見交換会」です。同年4月から11月まで4回実施し、いくつかの提案がなされました。
①共同直売所で地域をアピールする。②ブランド品をつくる（地域全体でエコファーマー^{*3}を取得、安心安全な農産物をつくる地域にする）。③農業体験を導入する（砥山農業小学校^{*4}）。そして、④サクランボ祭りの実施です。この提案をもとに、農業クラブと発見隊で取り組みをスタートさせました。

地域農家が6年がかりでエコファーマーを取得、活動を続けていくことで、地域や地元農家の意識も少しずつ変わっていきました。

現在では、さくらんぼ祭り5,000人、秋の収穫祭も3,000人の集客があります。農業小学校も毎年50人（約15家族）が参加しています。最近是全国的に行政が農



さくらんぼ祭り、丸太切り競争少年の部決勝

※3 エコファーマー

平成11年に施工された「持続性の高い農業生産方式の導入の促進に関する法律（持続農業法）」に基づき、都道府県知事が認定した環境保全型農業（化学肥料や農薬の使用を少なくした農業生産方式を導入した農業）を行うの黄業者（認定農業者）の愛称。

※4 砥山農業小学校

市民（小学生、保護者など）が農村で地域の果物や野菜などの農業体験をして、「農業・農村、農産物・食物」などを知ってもらう活動として、砥山農業クラブが八剣山発見隊の協力で平成15年度に開校した。

業体験の取り組みに注目、普及に力を入れていますが、私たちのように農家だけで実施したのは先進的な取り組みで、モデルケースとしても取り上げていただき、多くの視察がありました。

平成19年度からは定山溪温泉の観光協会、旅館組合と協力して、ホテルで出た生ゴミを堆肥にして地元の農家で使い、取れた農産物をホテルの料理に使ってもらう取り組みがスタートしています。

また、平成18年からは、札幌市南区の農家20数軒が共同の直売所「ふじのとれたてっこ」を実施するまでになりました。

私が就農したときには考えられないことでした。イベントに農産物だけ買いに来る人も多くなっています。食品偽装、農業問題などもあり、消費者の意識も農家の意欲も変わってきていると感じています。

“八剣山国際交流の集い”開催!

瀬戸さんは以前から、札幌在住の外国人に気軽に来てもらって観光農園で国際交流ができないかと考えていたといいます。平成18年には、発見隊のメンバーでもある北海商科大学の加藤由紀子準教授の協力で、中国人・韓国人留学生との交流が実現します。また、砥山地区の果樹園に外国人の方がいて、その関係もあって外国人の観光客が訪れるようになりました。そうした動きをもとに、平成20年3月には「八剣山国際交流の集い」を開催しました。参加国は10数カ国で、それにアイヌの皆さんが加わり、一般市民を含めた参加者は約1,000名。好評だったといいます。

砥山地区にある八剣山果樹園の奥さんのビアンカさんはドイツ人で、以前は札幌国際プラザに勤務していたドイツの環境問題を担当していたといいます。また、瀬戸さんの奥さんのメラルさんはトルコ人です。そんな関係で今はJICAの外国人研修生もよく遊びに来るようになりました。

「砥山地域は外国と関係のある人が多い。イベントがきっかけで札幌の農業を知ってもらうことができ

た。これからも国際交流の地域として活動を続けていきたい」

「八剣山発見隊のメンバーにはいろいろな業種の人たちがいて、それぞれのノウハウや技術を提供してくれたことで、いろんな取り組みができたと思っています。また、異業種の方たちが応援団として協力してくれたのも大きな力となりました」と瀬戸さん。

次のステップに向けた活動を継続!

「今回のような大きな国際交流イベントを恒常的に続けていくことは財政の問題から難しいですが、小規模でも持続的な取り組みを考えて続けていきたい。さくらんぼ祭りや収穫祭も毎年続けていきたいと思います。また、生ゴミ堆肥を地域の大きな取り組みにつなげていきたいと思っていますが、堆肥を農家が安心して使える品質にするなど技術的な課題も解決していかなければなりません。また、農産物を加工し、特産物として付加価値をつけ、農業経営や農家の生活安定につなげる取り組みが今一番大きな課題だと思っています」と瀬戸さんは今後の抱負を語ります。

*

都市近郊の小規模農家が地域を変えるために行動し、その輪が都市と農村、異業種間との交流を生み、地域を変える力になっていく。その力の源泉は、集う人々の変えよう、やろうとする意識だということを実感しました。大きなイベントの継続は財政的にも大変だと思いますが、規模に関わらず継続していくことがなによりも大切だと思いました。

八剣山発見隊

<http://www.hakkenzan.com/>



生ゴミ堆肥化推進事業
のパネル



八剣山国際交流の集い